

(1) 講話【意思に寄り添う事の難しさと尊さと…】

先日、Iさんの看取りを迎えました。口からほぼ食べなくなって3ヶ月、点滴等もご本人の強い意思で受ける事はありませんでした。ターミナルケアに関わるドクターの方々が、「栄養などの本人の体にとっては余分な物が入らなくなる事で、穏やかな最期を過ごす事が起こる」と仰るように、結果的にIさん、とても安楽な表情で息を引き取りました。ご本人が「意思を貫いた」という点においても、意思決定の1つのあり方を今回、目の当たりにした私たちであります。

これまで、「少しでも口から食べて欲しい」、「美味しく口にできる物が何なのか」という思いでご家族たちといっしょに、現場の皆さんが向き合い続けて下さった事も、私たちの経験という点において大切な財産となりました。おかげさまでした。

その一方で、頑なにと言ったらいいのか、食べる意欲を持てなくなったと言ったらいいのか、その取り組みとは裏腹に、ほとんど口にしないIさんが私たちの前に現実存在していました。

そんな中、先月のユニット会議の中で、そのIさんの思いに重きを置いた検討がなされました。以下は、その時の検討内容をケース記録から写したものです。

「食べないと…飲まない」と介護者の心配を押し付けるような声掛けは、本人にとってストレスになるだろうと感じるようになった。医療的な立場から点滴をほのめかすような発言も繰り返してきたが、そのような言葉も今のIさんを追い詰める要素となっているように感じる。今後どのように対応していくべきか、皆で考えたい。

【目指すべき方向性】

○本人の意向を尊重すべきだが、言葉通りに放っておけばよいという事ではないだろう。「死んでもいい」と口にしていたその言葉の裏側に、どのような心理が潜んでいたのか想像してみる必要がある。常に世話する、自分で何でもやるといったようなタイプだったであろうから、立場が逆転した現状にやるせなさを感じていたり、仕事や遊びで輝かしい時代が過去のものとなり、生きがいや支えを失ってしまっている事も想像される。

単純に誘い掛けを行っても同意が得られない可能性は高いだろうが、例えばMさん(妹さん)との面会に対して「明後日受診がある」といった動機づけとなるような一言を添えるだけで、好機を得られるかもしれない。(Mさんを見る目は、姉そのものを感じた)

家族と会っている時の表情は、職員には見せる事のない特別な穏やかさを湛えている事を考えると、今のIさんを支えている大きな要素として捉える事が出来る。先日娘さんと電話で会話した際も、10分近く会話を継続することができた。

目指すべきケアは、「寄り添っていく事」でいいのかと思う。今までもその様に取り組んできたから現時点で振り返りできるのだろうし、その事を家族も理解してくれているものと思う。以前とは異なる本人の現状に、どう合わせていかれるかを1つの焦点として考えていきたい。

私たちが施したいケアを超えて、本人の意思に寄り添うケアはこれからも難しい判断や対応が出てくる事でしょう。その度「生きる意味を発見し合える道場」(目的)に立ち還り考えましょう。

(2) 連絡事項について

[講話+①②=理事長]

- ① 調理のRさんがリハビリを経て、いよいよ現場に戻って来てくれます。体を慣らすために、15日、18日、25日、31日の4日間の出勤、そして14:30～16:30の短時間からの復帰となります。どうぞ、見かけたら声を掛けてさしあげてください。
- ② 意思決定支援の学びの一環として、「もしものための話し合い」をカードゲーム方式で行う「もしバナゲーム」を用いた職員死生観研修を行う予定です。

私の価値観や
優先順位を知る
代弁者がいる

To have an advocate
who knows my values
and priorities